
やおろすの神々のおわす国

ふうこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

やあらすじの神々のおわす国

【NZコード】

N4135Z

【作者名】

ふうい

【あらすじ】

その世界にはすべてのものに神が宿る世界。

水も食料も服も動物も人間に至るまで、すべて神々の恩恵で成り立つていて。

その神々と常にともにある存在、

『現人神』

そうよばれる存在は神々を僕にすることが出来るといつ。

そんな現人神である少女に、ある日、国の姫からの依頼が入る。

それは、姫の守護神探し。

現人神と姫をめぐる物語が幕を開ける。

序幕

深く先も見えないほどに濃い霧の貼つた大きな森。
空を見上げても、霧と木々に遮られ空はおろか太陽すらその顔を覗かせてはくれない。

道無き道には、獣の姿もなく不気味なほど森は静まり返っている。
今が朝なのか、または夜なのかわからない。

ただわかるのは、目の前に広がるのは、白い霧。 いけどもいけども、
その状況が変わらわけではなく、程遠い出口をやまよつて歩くだけ
なのだろう。

そんな森を息を切らして走る人影がある。

足音の間隔が短く小刻みにリズムを付けている。 どうやらまだ幼い
子供が、その人影と足音の主のようだ。

人影はある程度走ると後ろを振り返る。 そしてまた走り出す。
それをしばらく繰り返す。

どれほど進んだのだろうか、子供の人影は大きな木にもたれかかり、
大きな安堵の息をもらした。 逃げ切った……子供はそう信じた……
しかし。

「みいつけたあ！！」

ビクン身体を震わせる、得体の知れない森に響く不気味な声と共に、
子供がもたれていた大木が歪む。

グイイッと大木から伸びる腕。 その腕が幼い腕を強引に掴み、まだ
小さな体を宙へと放り投げる。 飛ばされた子供に抗う術はなく、そ
のまま地面へと叩きつけられてしまう、声にならない「めき声」を上
げあまりの痛みにその場から動けない。

その様子を見ていた、大木から伸びた腕は、またグイイッと形を変
える。 腕はやがて、人の形へと姿を変える。

子供は痛みで朦朧とする意識の中、その姿を見た。

「姫、鬼ごっこは終わりです。

あなたさえいれば、全てが手にはこめるのですよ」

「あうつー」と悲痛な悲鳴を上げ、自分の体が動かないことを確認した。

「姫様、そろそろ遊びの時間はお終いにしましょう?」

姫様と呼ばれた子供。

朦朧とする意識の中で、声の主を確認する。

それはどこかで聞いたことのある声だった。

「やれ」と男が命令を下す。

命令を受け、動き出す陰、それは男よりも遙かに大きく異形の形をしていた。その異形の腕が無慈悲に姫様へと向けられる。

姫は目をつむる。

死を受けいるためではない、死など覚悟などするわけがない。

歯を食いしばる。

何も出来ず、この人達に利用される。それが悔しくて仕方がなかつた。

異形の腕の鋭くとがった爪が横たわったままの姫を襲う。迫り来る狂氣を前に、声を絞り出して叫ぶ。

「私は……あんただらなんかに負けない!ー!ー」

それは力強い声。

しかし、その声に怯えることなく異形の腕が空を裂く。再び固く目を閉じる。

ドカア！！

響く鈍い音。けれど、痛くない。思えば、何も体に触れていない。何が起きたのか気になり、固く閉じた目をゆっくり開いていく。目に光が入り、あたりの風景が視界に入る。

心なしか、霧は晴れていた。目の前には何もいない。当たりを見回す、前方少し離れた場所に男と異形が2体。姫が確認した影は3体。もう一体はどこに行つたのか？ふと男を見ると、姫の上を見ていた。姫も上を見てみる。そこには。

「……これ……？」

異形が短い刀のような刃物に、姫が先ほどもたれかけていた大木に磔にされていたのだ。

「だ、誰だ！？」

慌てる異形を操る男。

すぐにその所業の犯人はわかることになる。

「良く悪態が付けましたね姫様……」

子供らしくてナイスでしたよ。」姫や男の視線が声の方へと向く。そこには一人の少女が歩きながら、こちらへと進んでいた。その出で立ちは、神社などにいる巫女のよう。

ただ、胸元がやけに開いていたり、ミニスカートだったり、太ももまであるソックスを履いていたり、肘よりも長い手袋をしていたりと巫女とは少しがけ離れている。

更に、少女の神に姫は魅入られる。

ウェーブがかかった長い髪、しかしその髪の色が雪のような銀色の髪。

田が庵をにへい森の中でさえ輝いていたようだつた。

「何だ貴様はー?」

少女は立ち止まり、腕を組む。

「ああ…、あなたの邪魔をしきただけよ

少女は顔に笑みを浮かべ答える。

「あの……」

姫が動こうとするとき、「ボフ……」といづ音と共に磔にされていた異形の者が黒い霧となり、宙へと霧散していった。異形を磔にしていた短刀が少女の手の中にふわりと戻る。

手の中に納められた短刀の刃の部分には、文字のよづな記号のよづなものが一面に描かれてある。その短刀を肩にポンと軽く乗せ、男を軽視した視線と笑みをまだ幼さの残る顔に浮かべる。

「あんたがこのまま無様な姿晒しておめおめと逃げ帰り、一度と姫には近付かないと誓うなら何もしない。この忠告を無視するのなら、容赦はしない」

少女の忠告。しかし、そんな言葉など男が受け入れるはずもなく。

「俺は神を操る神縁者のガトウだ!! 少し力が使えるからといつていきがるな小娘!!」ガトウと名乗った男は激しく激昂する。そのガトウに呼応するように、残り一体の異形が動き出す。

異形の腕は一直線に少女を狙う、速度はかなり早い。少女に交わすすべなど無いように思われたが。

「キスミ」と少女が呟く。すると、少女の目の前の空間に青白い薄透明の盾のようなものが突如現れた。

異形の腕が、その盾に吸い込まれるように動き、青白い火花を散らして弾かれる。

「アオイ」と次に少女が呟く。少女の手にしていた短刀が再び宙に浮く、短刀は意志があるかのように、異形に斬りかかった。なすすべもなく切り裂かれた異形は、先ほどの磔にされた異形と同じように宙に霧散していった。

「な、何だと！？」

手駒を失ったガトウ。その様子は激しく狼狽している。

「こんな脅神、いくら使役しようと私には、指一本触れられやしない！」

「俺は神縛者の……！！」

少女が右手をガトウに向けかざす。するとガトウの動きが止まった。ガトウは必死にもがくが、ぴくりとも動かない。

「安心しな死にはしないよ、ただ異空間で余生を過ごしてもうつけどね」

ガトウは己の目を疑つた。かるうじて動かすことのできる、目で自分の体を見る。そこには立体だった体は無く、平面となり宙に浮いていた。

少女がかざした腕の指を動かしていく、その指と連動しているのか、平面となつたガトウの体が折り畳まれてゆく。音はなく静かにおられてゆくが、ガコングコングと几帳面に折られる。

数秒もしないうちに、ガトウの体はそこには無く、彼の平面となつた頭部だけがそこに存在していた。

頭部だけとなつたガトウに少女が近づいてゆく。

「何か言つとくことあるかしら？」

「……何なんだ貴様……！？」

ガトウの言葉を受け、少女は静かに目を閉じる。ゆっくり視界を開け、唇を動かした。重くゆっくりと。

「私は現人神、私は神と常にともにある」

「覚えたぞ現人神……必ず……」

ガトウが捨て台詞を残し、残されていた頭部も最後まで折り畳まれ、その場から消滅した。

消滅したことを確認すると、横になつている姫へと振り返る。その体は泥だらけとなつており、高級感あふれる着物も台無しになつている。

意識が朦朧としている彼女を少女がひょいと持ち上げる。

「さあ帰りましょうかね」

薄れゆく意識の中、姫が見たのは、女神のよつに優しい笑顔をした少女の顔だった。

すべてのものに神が宿る世界がある。我々がいる世界とは似て非なる世界。

草木や動物、水や風や空、鉱物にいたるすべてのものに神は宿っている。人々は、その恩恵にあざかり生活をしている。

水の神々の力によつて水が湧き、風の神々の力によつて大気が巡る、大地の神々の力によつて大地に恵みを与える。

だが時に神々が暴走する時がある、水の神々が洪水を起こし、風の神々が嵐を呼ぶ、大地の神々は大地を揺らし人類の文明を破壊する。神々が暴走するとき、人々に抗う術はない。

ただ一つの存在を除いては、

世界にただ一人だけ、ある称号を持つものがある。

『現人神』

そうよばれる存在は時に、神を鎮め、髪を従える。

神の調律者、その存在は人々の目に触れることはない。

その力を利用されることの無いように……

それほど大きくはない町がある。

その町の一角に人の山が出来ていて。あまり人口のいらない町ではあるが、人口の三分の一程度の人々が集まっている。

彼らのお目当ては、人の山ができている前にある家。その中にいる1人の少女。その少女に注目が集まっていた。

少女の出で立ちは、一言で言えば神社で働く巫女のよう、けれどかなり崩れた格好になつていて。平安時代の稚児を思わせる上着と、かなり短いミニスカート。足には太ももまであるソックスを履いて

いる。

頭髪は黒く、長い髪を後ろで一本の三つ編みとしてまとめているが、肩甲骨より少し長い。

重ねた長い眼には下半分に縁がついている眼鏡を着用している。彼女の視線の先には、横たわる若い女性。

顔色は悪く、青白い顔をしている。一日で何かの病を患っていることがうかがえた。「本当に大丈夫なのか?」「まだ子供じゃないか等、ヤジが飛んでいるが彼女は意にも介さない。

横たわる女性の側には、これまた青い顔をした男性、しかし彼の場合病ではなく病を患った妻を心配してのことだろう。

少女はその夫の顔をちらりと確認し、優しく「ひとつ」と笑った。

少女の腕が動く、額を撫で、頬を撫でる。

そうやってどんどん下へと動く腕。そしてある場所でぴたりと腕が止まる。

「ここね」と呟く。

そこは女性の心臓。

少女はその位置に、手を軽く押し付けた、目を閉じる。沈黙が続く。ある程度の時間が流れる。少女は微動だにしない。

しばらくすると、女性が軽いうめき声を出す。

大衆が押し寄せ、自分勝手に騒ぐ中でのうめき声。その場にいるものは誰もが気づいてはいなかつた、彼女を除いては。

少女はそのかすかな女性の変化を見逃さなかつた、少女は目を見開いた。直後野次馬がどよめいた、野次馬の視線は一点に集中していた。

その視線の先、少女の腕が女性の体内へと侵入している光景を見ていた。血液は出ていない、表現としてはすり抜けているが正しいかもしぬれない。すり抜けた腕を侵入させてから今度はさほど時間はからなかつた。

「見つけた!!」

響く少女の声。

少女は侵入させていた腕を一気に引き抜く。

野次馬の視線は、その腕へと集中する。

少女は何かを指で摘んでいた。

小刻みに動く虫のようなもの。

その正体はすぐにわかることになる。

「やつぱり病神か……」

病神……彼女はそう口にした。

氣づくと、青白い顔をしていた女性の意識が戻っている。

顔色も血色がよい。

隣にいた夫もそれには驚いていた、まるで妻にだまされでもしていたのだろうかと。

しかし、そこは少女の説明を聞いて彼は納得することになる。

「これが病の正体よ」

「……こんなバッタみたいな虫がですか？」

「これは病神といって、様々な病を引き起こす病気の神の一種。こいつが体の中にはいると、さっきの奥さんのように薬も効かない病に掛かるの。まあ、最下級の神の一種だから大事には至らなかつたみたいだけどね」

少女は病神を手のひらに包み、力を込める。

手のひらから淡い光が溢れ、病神の姿はそこから無くなっていた。

「もうこれで大丈夫」

少女の笑顔を見ると、夫も安心したのか、笑顔で「ありがとう」と礼を言う。

それを確認した少女は、手を振り一人の家を後にした。

その帰り道、少女はぶつくさと独り言を呟きながら河原沿いを歩いていた。

「朔夜様、何でお金を受け取らないで帰つたりするんですか？
今月赤字何ですよ？」

「つむさいわね、人助けで仕事しててのに、お金なんかもらえるわけ無いでしょ？」

「甘いんだよ朔夜様は！！他人よります自分だろ？なのに人助けばっかりで、こっちのみにもなってよ」

「そりやすみませんね」

彼女が独り言を言つていてるよつに周りの人間にもそう見えた。
だが実際は違う。

良く彼女を見てみると、耳が、腕が、懷の中から淡い光がでているのがわかる。

耳は赤く、腕は黄色に、そして懷は蒼く。

朔夜と呼ばれた少女はその光に対して話をしている。
耳飾りの宝玉が赤く光る。

「あなたは本来なら、このようなことをされなくても良い御方です
のに」

「仕方ないよミアカ

懐の短刀が蒼く光る

「良くないよ、アナタは僕達の主なんだよ！？」

「……アオイ……」

腕の鏡をあしらつた腕飾りが黄色に光る。

「まあそんな優しい朔夜様だから、俺達はたのしくいれるんですけどね」

「ありがとうキスミ」

朔夜はしばらく川沿いを歩く。どれくらい歩いたのだろうか？ 辺りは、太陽が沈みかけ、空が黒く変色しかけ薄暗い。

朔夜ものんびりしきっていたのか、少々早歩きになつた。また、少々歩く。

次第に朔夜の瞳にあるものが飛び込んでくる。夜でも鮮やかに彩る、真っ赤な鳥居が。

そこは神社、朔夜は住居として住まわせてもらつてゐる神社である。神社の名前は、

『高千穂神社』。

神社のいわれや、建てられた年代などは全く知らない。

朔夜がここを訪れたとき、すでに誰もいなかつた。奉られているはずの神の存在もなく、彼女が使わせてもうつことにしている。

この神社には、幸いなことに、台所、浴室、トイレが付いていたた

め、意外と快適なようだ。

朔夜は帰つてくるなり、布団に飛び込む。

「お行儀悪いですわよ」

ミアカの声がすると同時に、耳飾りからポンと小さな少女が現れた。10歳程度の女の子、髪は赤く、瞳まで燃えるように赤い。服まで着ており、ミニチコア版天女のような出で立ちである。この少女が実はしゃべっていた耳飾り、ミアカの正体。普段は朔夜を守護するために、装飾品に変化しているようだ。アオイ、キスミも同様のようである。

「いいじゃない、今日は疲れたの」

「駄目です、お風呂も着替えもしてないのにいけませんわ……」

朔夜が布団に潜り込もうとするとい、ミアカに布団を引っ剥がされた。

「なにするのよ!!ミアカ！」

「怒鳴つても無駄ですわ、わあお風呂の支度をしますので」

ミアカが浴室に行こうとしたとき、朔夜の懐からポンと、蒼い髪と蒼い眼をした侍のような袴姿の、ミアカと同じ10歳程度の少年が現れる。

「こきなり、じりじましたのアオイ？」

「お風呂はもう少し後だね、お客さんが来たみたいだよ」

アオイの言つたとおりだった、玄関の方から戸口をたたく音が聞こえ

ている。

続いて腕飾りからポンと、金髪と金色の目をした着流しを着ている
10歳程度の少年、キスミが現れる。

「俺が出てきます」

「少しでも怪しかったら、追い返してね」

三人の警戒心は異常なほどに高まっている。少しでも自分達の主人
に何かあつてはいけないという思いからだらうか。

朔夜はそのことを、嬉しくもあり、寂しくもあるような表情でみて
いた。

キスミが玄関へと着く。戸は先ほどから叩きっぱなし、文句の一つ
でも言つてやるうかと、キスミが戸を激しくあける。

「やあ坊や、こんばんは」

拍子抜けするような優しい声。
キスミが声のした上を見る。

「ここに、現人神様がおられると聞いてきたのだが、今はご在宅か
な？」

現人神……何故こいつが知つている？

キスミは敵意むき出しの目で男を睨む。

「おいおい坊や、私達はケンカをしにきたわけじゃないんだ、そう
睨むなよ」

男達は十数人。それぞれが甲冑を着込み、刀を腰に差している。

ケンカをしにきたわけじゃないというが、その様子を見れば誰でもそう構えるだろ？。

最初なキスミに挨拶をした男、他の男達とは違い一際立派な黒光りする甲冑を着込み、背中には自分の背丈ほどはあるうかという大剣を背負っている。

「私は元就。ヤマトの左将軍だよ、現人神様に取り合つてもらえないだろうか？」

「誰が…… もがつ！？」

追い返そつとしたキスミの口を閉じたのは、慌ててやつてきたアオイ。

口論になつてているのを心配して來たようだ。

「何するんですかアオイ！？」

声を荒げるキスミに対して、アオイは静かにしゃべる。

「バカ！ ここでもめれば、万が一朔夜様に危害が及ぶ、それはなくとも正体が知られる」

その言葉にキスミは口を閉じた。

アオイとキスミが落ち着くと、奥から朔夜が玄関へとやつてきていた。

「二人共ありがとう、元就さんだつけ？ 入つて」

元就是言われるままに、朔夜の後について行き、居間へと案内された。

「……要件は？」

座るやいなや、朔夜が口を開く。
この突然の訪問を、彼女も快く思つてはいないようだ。
元就は背中の刀を起き。

「王が先日件で、礼をしたいとのことで」

「礼？」

「先日、姫がさらわれました、それをあなたがお救いになられたと」

「……人違いでしょう、私にはそんな大それたこと出来ないわ」

ミアカが用意したお茶をする。

元就もそう簡単には引き下がらない。

「我々の力を見ぐびらないでください、あなた一人搜すのなどさほど労もない。

人違いならそれでも構いません、王も姫も納得してくださります」

朔夜は三人の顔を見る。それぞれが反対の意志を示した表情でこちらを向いている。

朔夜には隠したい正体がある。それが国の王であつとも、むしろ王であるからこそ隠したい。

今、断れば背中の大剣をすぐにでも抜きそうな雰囲気もある。

朔夜には三人がいる、勝算はある。

しかし、国を敵に回しては正体どころではなくなる、彼女の選択はおのずと絞られた。

「断るつて選択肢はあるの？」

「あなたが、現人神様であるなら我々に強制は出来ません」

朔夜は静かに目を閉じる。

答えを出すのにそう時間はからなかった。

「わかつたわ、都まで行けばいいのよね？」

交通手段はそちらが用意してくれるのかしら？」

「それはもちろん」

朔夜が行くと答えた瞬間、元就の周りの空気が軽くなつた。

「……そんなに緊張でもしてたの？」

「断りられたらどうしようとかと思いましてたので」

重苦しい空氣から一変して、和んだ空氣へ。

ミアカ達も気にしそぎたかと、少し氣を緩める。彼女を除いては。

「ところで元就さん？」

「はい、何でしょう？」

「……その剣、玉が一つほど無いようだけど？」

朔夜は湯飲みのお茶を飲み干しながら、元就を睨み話しかけた。

「……まあ古い刀剣のようですので、いつ紛失したかまでは……」

גַּתְּהָרָה

朔夜は何もなかつたかのように笑顔でかえした。元就は先に都へ帰ると良い、朔夜に都までの蒸氣船のチケットを渡す。
それと、旅の護衛にと若い部下の兵士を一人残し、足早に馬を走らせ、朔夜の神社を後にした。

...座った?」

若い兵士はえらく緊張した様子、まさか新米の自分にこんな大役を任されるとは夢にも思つていなかつたのだろう。

しかし、緊張のあまり、動きはギクシャク、変な汗までかいている。こんな様子で大丈夫なのかと心配する朔夜達だったが。

「だだだ、大丈夫です！じじじ自分にお任せください！」

その言葉に更に心配になる4人。

朔夜はあれこれ考え込んでも仕方がないと考へて、今田のところを休むことにした。

「じゃあ私寝るから」

「お休みなさい」

声を合わせるアオイとキス!!。

「ダメですわ朔夜様、先にお風呂、その後歯磨きもですわ！」

「え～もうついでー！」

「ダメつたらダメですわ！」

その後しばらくミニア力との鬼ごっこが続き、更に疲れるはめになる
朔夜であった。

旅立ち

その日は冷たい雨が降っていた。

季節は木々の赤い化粧も取れ、赤い羽として空を舞う季節。雪こそまだ降りはないが、いよいよ冬が到来という季節となつた。そんな雨の降る寒い朝、高千穂神社の本堂の前にじつと立つている少年がいる。

昨夜、朔夜の道案内として残されていった足軽の少年である。朔夜達からは中についてもいいと言われてはいたが、年の近い女の子と一つ屋根の下で寝るわけにはいかないと、一人外で夜を明かしてしまつていた。

寒さに特別強いわけでもなく、特別厚着をしているわけでもない。ガタガタと体を震わせ、ガチガチと歯を鳴らしている。

しかも、この寒さで眠れるはずもなく、彼は一睡もしていない。寒さと疲労がピークに達していたとき、彼に女神が現れる。ガラガラと玄関が開く。玄関の明かりの中から現れたのは

「……よく一晩も外にいれたもんね……」

呆れ顔をした朔夜だ。

「寒いんでしょ？ 中に入つたら？ 夜も明けたんだし」

玄関の戸に背中をもたれ、少年に家へ入るよつにと促すが。

「いいいえ、じじ自分は任務が、あありますので」

「心配しなくとも私は逃げたりしないから、そんなことより死んだらそれこそ台無じじゃない？」

あんた馬鹿なの？」

「……自分は……」

少年は寒さのあまり呂律がまわっていない、呂律の回らない口で何かを訴えようとしていたが。

「良いから、中に入りなさい」

組んでいた腕を解き、少年のすっかり冷たくなった手を握る、そして半ば強引に家の中へと引っ張り込んだのだった。

中は、外に比べ当然のごとく暖かい。少年も暖かい空気に触れ、ほつとする。やはり、相当無理をしていたようだ。

少年が少し落ち着いて、辺りを見回していると。

「暖かいスープですわ」

赤い髪の女の子が後ろからお盆の上に乗っていた、スープの入っていたお椀を差し出してきた。

少年は、言われるがままお椀を受け取リスープをすする。すると、凍えていた体が全身ポカポカと暖まってきたのだ。

「暖まるでしょ？ 食材の神の力を少し借りてるからね」

「……食材の神？」

「そうよ、この世界には何にでも神様は宿っているのよ、私はその力を少しだけ借りれるの」

「……それが現人神？」

「否定はしておくれ」

後ろ姿で手をひらひらと振り、朔夜は自分の名前がかかった部屋へと入った。恐らく着替えるのだろう。

少年はスープを一気に飲み干した。あまりの美味しさに涙が滲んでいる。彼はこんな暖かい料理を食べたのは久しぶりのこと、無理もない。

少量のスープで満足出来たのも、先程朔夜が言つたように、食材の神の力のようだ。

少年の腹が膨らみ、ひとこじちつくと、急に不安が大きくなる。彼の上司、元就の命令では『玄関から一步も動かず、朔夜を監視しろ』という命令を受けていた。しかし彼は動いてしまった。監視対象の朔夜に家に招き入れられたとはいえ、命令違反。

顔が青ざめていく。

そんな彼の様子をミアカが心配して。

「大丈夫ですか？ スープが合わなかつたのですか？」

心配そうに見つめるミアカだったが。

「大丈夫よミアカ、私が家に入れたから命令違反とか心配してるのはよ。

つたく、そんなことで処罰する奴なんかいないわよ」

「ですが……」

「あんた、名前と歳はいくつ？」

「け……謙信……16です……」

「私と同じ年じゃない、良い？敬語禁止だからね、私は同年代の人間に敬語使われるの嫌いなの、わかつた謙信？」

「はい……うん……」

謙信のとつさにでた敬語を言い直すと、「よろしい」と笑みを頬いつぱいに浮かべ、満足そうにミアカの朝食を食べた。

「ねえ謙信、いつ頃迎えが来るの？」

「わかりませ……わからないよ、僕も何も聞かされてないんだ」

「まあ、あんた下つ端みたいだからね」

「はつきり言うんだね」

「言わないと、もつたいないでしょ？」

同じ年同士意気投合したのか、「冗談を言いつつ朝食を食べ終わった。ミアカが食べ終わつた食器を片づけるため、台所へ向かつたとき、外から馬の蹄の音が聞こえてくる。

馬は一頭ではなく、五頭程。その五頭すべてが高千穂神社の境内に侵入し止まつた。

馬が止まると、程なくして5つの着地する音、5つ全てが甲冑を着ているのか、ガシャという音を鳴らす。

「来たみたいね……ミアカ片付け終わつた？」

「もちろんですわ」

ミアカが台所から戻るなり、彼女の全身が赤い光に包まれる。

野球のボール程度の赤い光の玉に姿を変え、朔夜の耳飾りに吸い込まれていった。

「……え？」

何が起きたのかわからない様子の謙信。その謙信の尻目に。

「いい三人共、私がいって言つまで出てきちゃ駄目だからね」

朔夜の問いかけに答えるように、耳と懐と腕がそれぞれの色に輝いた。

玄関をたたく音が響く。

「謙信、今の内緒だからね」

「…………うん…………」

謙信の唇に自分の人差し指をそつと触れさせ、解いていた髪を三つ編みに編みながら玄関へと向かつ。

「現人神様、お時間です。港で船が待っていますのでお早く

「言われなくても行くわよ、ちゃんと食事とかあるんでしょうな?」

「それはもちろん

朔夜を出迎えたのは、先日の元就とは違い全身赤でそろえた出で立
ちの女性だった。

髪は肩までと短いが、ウエーブがかかっている。甲冑は所々肌が見えており、ミニスカートのような腰当てとブーツを履き、太ももは素肌のままである。

ただ、威厳と気品に満ち溢れており、元就よりも将軍らしく立ち振る舞いをしている。

彼女は朔夜が出てくるなり、片膝を付き、頭を下げ手を頭の前で組む。

いわゆる臣下の礼の形を取っていた、元就よりも礼儀にはまつたといふのである。

「では」ひに乗りください」

五頭の馬とは別に用意されていた馬車に乗るよう促される。朔夜がその馬車に乗り込むと。

「謙信」「苦労様、私が馬車に乗りますので、あなたは私の馬を頼ります」

玄関の中でオロオロしていた謙信に、優しく微笑んだ。

朔夜が馬車に乗り込んで一小時。

景色がどんどんと移り変わってゆく。

朔夜は今まで旅をしなかつたわけではないが、今回のような長旅は経験がない。ましてや、馬車になど乗ったこともなかつたのだ。

また、蒸気船と言つことは、海にでると言つこと。朔夜はまだ海を見たことがない。汽乗りしていなかつた都への旅ではあつたが、そ

れはそれで楽しんでるやうじよ。

またしばらく走り、気がつくと辺りに潮の香りが漂つてきている。
海が近い。

はしゃぐ朔夜は、ニアカ達に海のことを見ていた。

「ニアカ、海って広いんじょ？」

「そうですね、世界の三分の一が海ですね」

「それに、海は凄く深いしょっぱいんだよ」

「そんなことお塩使つてゐの？」

「後は生き物も豊富にいます、一度は大海の神にもお会いしてもらいたいものです」

周りのことなど気にせずに三人と話していく。

「誰かとお話をですか？」

「あ……ひ、独り言？」

「……は、スルガの港と呼ばれております、少々ここでお待ちくだ
れこ」

そう言つと、女将軍はその場を後にした。

朔夜は港を見回す前に、初めて見る海に目をとらっていた。

蒼く光り輝く海面、数多の神々が語りかけてくるような、生命の躍動する力強い海を見て感動を抱いていた。

海水をなめてみると、アオイの言つていたとおりにしょっぱく、水中を覗いていると、見たことの無い生き物で溢れていた。子供のようにはしゃぐ朔夜だったが、彼女を呼ぶ声がする。

「……朔夜様、朔夜様」

ミアカ達ではない、あの女將軍でも謙信の声とも違つ。誰だらうと、前後左右と見回す。すると……

「朔夜様下ですわ」

ミアカに言われるままに下を向く。

「こんにちは朔夜様」

朔夜の足元に綺麗な女性の小人が。たたずまいから女神であるようだが。

「朔夜様、この方はこのあたりの土地神様でござりますわ」

「へえ、でも何で私の名前を知っているの？」

「ミアカ様から聞いていらっしゃらないのですね、私達神々はあなたが生まれる前からあなたをこ存知していますよ」

「やうなのミアカ？」

「そうですね」

「ところで朔夜様……」

土地神が何かを語ろうとしたが、場を離れていた女将軍が朔夜の元へ戻ってきた。

どうやら彼女は、朔夜を都へ送るための蒸気船を探していたらしい。予定よりも到着が遅れていたようだ。

「現人神様、船の準備が出来ましたので……今誰かとお話でしたか？」

通常普通の人間には神の姿を見る事は出来ない。以前の病神のように例外なものもあるが、神が自ら姿を表さない限りは人の眼にその姿は映ることはない。

「そんなことないわよ、じゃあ行くんでしょ？」

「はい、いらっしゃいます」

最後に土地神の彼女を振り向く、土地神は言いかけた言葉を最後まで紡ぐ。

「お気をつけ下さい……都には不穏な気配が漂っております……」

不穏な気配？何かが引っかかりつつも、朔夜はその土地神に別れを告げた。

いくらか歩き、建物の向こうからでも分かるほどの大な船が視界に入つてくる。

その巨体は漆黒の塗装を纏い、阻むもの全てを蹴散らしそうなほど の力強さを感じさせる。

これが朔夜が乗り込む蒸氣船のようだ。

「これが我がヤマトが誇る蒸氣軍船『葛城』です」

周りにも幾つかの大きな船が止まつてはいるが、葛城の前には玩具 の様である。

まさに、国の威儀を再現するかのような姿だ。

葛城に乗り込む朔夜と女將軍。そして、朔夜がどうしても頼んだ ので、謙信が再び同行する事になった。

「都の『武藏』まではおよそ三時間程度です。それまでゆっくりと していてください」

朔夜を部屋へと案内した後、謙信をそのまま残し彼女は船の中に消 えていった。

朔夜が案内された部屋にはベッドが一つ置かれているだけで、他に は何も無い。

窓も丸い小さな小窓が一つ付いているだけ、しかも嵌め殺しの窓で 開くこともできない。

「まるで囚人みたいね」

謙信に向かつて皮肉たっぷりの言葉を浴びせるのだった。

「不自由だらうナビ、我慢してよ」

謙信も顔に苦笑いを浮かべ言葉を返した。

「あの朔夜さん、今朝君の周りにいた三人は置いてきたの？」

謙信には三人がアクセサリーの中にいることなど予想もしていない、幼い子ども達だったので気になっていたようだ。

「側にいるわよ」

「……どこに？」

「ミアカ、アオイ、キスミ出てきていいわよ」

朔夜の許しが出ると、ポンポンとミアカ達が朔夜のアクセサリーから飛び出した。

これには謙信も驚いたようで、少々後ずさりしていた。

「……この子達は？」

「私と契約している神様よ」

「神様！？」の子達が？」

「そつ、まあ何の神様かは教えられないけどね、この子達の存在に
関わるから

「君は一体……現人神って何なんだい？」

この世界は神の恩恵を受けている、と言つても大半の人々は神の存在を知ることなくその恩恵に預かっている。

しかし、神の声を聞くことができ姿をみることができるものがいる。そんな一部の人間によつて神と人間のバランスが保たれているのだ。

「……私はただの人間よ」

人類は蒸気船の開発により、その移動範囲、移動速度を驚異的に延ばすことに成功する。

朔夜が船に乗った港スルガから、通常の海路で武藏までは5日程度の時間をしていたが、蒸気船はわずか三時間という。この船により、貿易が更に盛んになり国はより豊かになつている。

また、ヤマトに住む人々は海の向こうを知ることは無かつた。

しかし、蒸気船の開発、実用に伴い、海の向こうにも世界が国が存在することが確認されたと言うが、それを朔夜が知るのはまだしばらく後のことである。

朔夜は生まれて初めての船旅ではあったが、特に船酔いすることもなく部屋に座つていた。

むしろ船酔いしているのは、何度も船に乗っているはずの謙信の方で、出航してまだ一時間程度ではあるが、もつ三回ほどトイライレに駆け込んでいる。蒸気船から見える景色の動くスピードは速く、陸上での馬車など比べものにもならない。

朔夜は狭い部屋の中で特にすることなく、ただぼんやりと移動してゆく景色を楽しんでいた。

「良ぐ平氣だね朔夜さん……」

青い顔で明らかに平氣ではない様子の謙信。

「あんたこそ大丈夫？病氣？」

「あれは船酔いですわ」

「ははは、少しは楽になつたよ……
といふでさ」

「何?」

「さつき言つてた神様つて?」

謙信は先ほどの朔夜の台詞に引っかかっていた。神を信仰する宗教はある、この世界が神の恩恵で成り立っていることも知つていて、だが、誰もが神の存在を知つているわけではない。謙信も神とは抽象的な存在だと信じていた。

しかし、彼は目の前で神の存在を確認していた。現人神に仕える人間の子供の姿をした神。

それは本当に神なのか?謙信はそれが知りたかった。

「ミア力達のこと?

何の神様とか真の名前は教えられないけどね、あんたは気付いたことはないかもしけないけど、神様はどんなものにでも存在しているよ?」

例えば、あんたのその刀のなかにもね」

「これ安物だよ?」

「そんなことは関係ないわよ、大事にしてあげればきっとその刀の神様も答えてくれる」

謙信はしばらく自分の刀を眺めていた。

この中にも神様がいる、だとしたら少なくとも、この刀に認められ

「ここは頑張りつゝ、心に誓つのだつた。

蒸気船がしばらく走り続けると、朔夜の船室の窓からでも確認できる巨大な建造物が見えてくる。外見こそ和風の城の様ではあるが、その巨大さは比べ物にならないほど巨大である。

また、この海域には無数の蒸気船が行き来をしているのがわかる。流石に国の都と云ふこともあり、貿易も盛んに行われてくる。

「朔夜さん、あれがヤマトの國王が住んでらっしゃる、白龍城だよ」

白龍の名の通り、白く輝く美しさを持っている。王家の権威や威儀をそのまま現したかのようだ、城だった。

コンコンと部屋をノックの音が響く。ドアを開き、中に入ってきたのは女将軍。

「もうじき港に着きますので準備の方をお願いいたします

女将軍は再びその場を後にした。

言わされたとおりに荷物の準備を始める朔夜、しかし。

キイイイン……

激しい耳鳴りが彼女を襲つ。

「朔夜様！？」

耳飾りが赤く光る。

朔夜の耳鳴りはしばしが、それが起るときはた

いてい、敵意を示した何かがいるときに起ころ。

朔夜は蒸気船に乗る前に話をした土地神の言葉をふと思い出す。

『都には不穏な気配が』

その正体が何なのは分からぬが、妙な胸騒ぎを覚えていた。

準備が終わる頃船は港へと着岸する。

周りには軍艦しかなく、軍の港のようである。

女将軍に促されるままに、タラップを降り港へと進むと、そこには先日朔夜の元にやつてきていた、左將軍と名乗った元就が朔夜達を出迎えていた。

先日とは違い、神妙な面持ちの元就、彼は急に片膝をつき、手のひらを田の前で組む。

「長旅、お疲れさまですぞいいます……

……陛下」

陛下とは恐らくは、このヤマトの王のことだらう。

しかし、どこにそんな人物がいるのだろうか？

朔夜がキョロキョロと周りを探している。

しばらくすると、周りの人々全てが臣下の礼をとっていることに気づいた。

今立ち上がっているのは、朔夜ともう一人……

その人物は探すまでもなく、朔夜の隣にいる。

「『苦勞様元就、皆も頭を上げなさい』

それは、朔夜を迎えてここまで彼女を連れてきた、女将軍だった。

「……あなた、王様だったの？」

「そう言えばまだ名前も名乗ってはいませんでしたね、私はヤマト国第24代国王、蟹王、瑠璃と申します」

左将軍と名乗った元就よりも気品が溢れているとは思っていた、しかし国王とは思いもしていなかつた。

「黙つてるなんて人が悪いよ？」

「ただ忘れていただけですよ」

瑠璃の告白からすぐに馬車に乗り換え白龍城へと向かうことになった。

向かう途中、城下町の大通りを通行してゆく。
朔夜がいた周辺の街とは比べものにならないほどに、巨大な町並みが並ぶ。

大通りを歩く人の数も桁違いに多く、活気も凄い。キイイイン……
また耳鳴りが朔夜を襲う。船で感じたものよりも強い耳鳴りを。
再び街に目をやると、どこか恐怖に支配されているようにも見えた。視線を別の場所に移す、そこには多くはないが、人が集まっている、集まっている人の視線の先には横たわる子供の姿があつた。馬車から遠由でもわかる、子供の顔に精気はなく既に事切れていることが。

「……まだですか」という瑠璃の言葉。何かがこの都で起きていることは想像がついた。

「キスミ、アオイ」

朔夜は瑠璃に気付かれないように、一人に話しかける。キスミ達もそれに答える。

「どうしました？」

「少しこの街の情報集めてくれないかな？」

「今の子供のことだよね？」

「ええ、港での土地神の言葉も気になるし」

「わかりました、ニアカだけでも大丈夫とは思いますが、その間お気をつけて」

「朔夜様は私が護りますので、一人こそ気を付けてくださいな」

「任せたよニアカ」

蒼い光と黄色の光は瑠璃に気付かれないように、そつと馬車の隙間をくぐり抜け、町の中へと消えていった。

二つの光は、路地へと入り人気の無い場所で動きを止める。アオイ達はその場所で人の姿へと姿を変える。

二人は更に一手に分かれ、町の中へと消えていく。

キスミはそのまま大通りへ、アオイは裏通りへと向かう。

子供の姿で走る二人を追う陰がある。一つはキスミを追い大通りへ。もう一つはアオイを追いかけていた。一人には気付かれないようギリギリの距離を取りつつ尾行してゆく、アオイが十字路を曲がる、陰も続けて曲がる。……しかし。

「やあ、早速来るのは思わなかつたよ」

アオイは陰の尾行に気づいていた、だから十字路を曲がり待ち伏せていたわけだ。

「ちょっと君には話を聞きたいんだよ、覚悟してもらひなよ」

グニィイ
……

陰の形が変わる、球状の形をしていたが何かの姿に変形してゆく。

「…………こいつは！？」

その頃、朔夜は白龍城の正門に到着していた。

門と言つても想像が出来ないほど巨大な門、昔朔夜が本で見た巨人よりも大きな門がそこにそびえ立つてゐる。

瑠璃が門の前に立ち、目の前にある家紋だらうか？紋章に手をかざす。すると、巨大な門はその大きさには似合わず、音も立てずに開門されていった。中にはいると、左右に整列され統一された甲冑を着込んだ兵士達。各々刀を握つた手を胸の前に掲げてゐる。その兵士達を抜けると、目の前には拝礼をする集団が、彼らは兵士とは違ひ甲冑を着ていない。

変わりに身につけてゐる服は、武士が着る袴を着用してゐる。

彼らはこの国の文官のようだ。

文官のうち一人が立ち上がる。彼は他の文官よりも、威厳があるようにも見える。

「お帰りなさいませ陛下」

「かし」「まじくても、私は2日程城を開けただけですよ?」

「いえ、それは国にとつては一大事です」

真面目な人だなと朔夜は思った。

「朔夜様、こちらがわが国の宰相で夫の幸村です」

「お見知りおきを」
意外に若い夫婦だと朔夜は思うが、王族などそんなものなのかと納得していた。

「朔夜様、私は着替えて参りますので、部屋でお待ちください幸村に案内させますので」

瑠璃はその後数人の侍女と共に奥へと消えた。

「朔夜様こちらへ」

幸村に促され朔夜も移動を始めた。

城の内部は想像以上に広く、誰か案内がいなければすぐに迷子になつてしまふだらう。

通路の両脇には高そうな壺や絵画などが飾られている。誰かの趣味なんだろうかと考えながら進んでいた。

また、大理石の通路や板張りの通路をいくつも通り、ある部屋へと案内された。

そこは和風の茶室のようで畳が敷き詰められている。部屋の中央に

は囲炉裏が設置してあり、お茶を煎れるための道具もそばに置いている。窓の外をのぞくと、豪華な日本庭園が広がっていた。

「それでは、陛下がこられるまでゆっくじと

一人部屋に残された朔夜、どこで見られているかわからないからとミアカと話をする事もできないでいる。

朔夜が今行る場所は城の後宮と呼ばれる場所で、幸村のような例外を除いて男が立ち入ることができない、謙信も中にはいることができず、ミアカこそ側に行くのだが今は朔夜一人になっていた。

一人で待つのは暇なようで、どう時間をつぶしていいのかわからずに戸に置に寝そべっている。

スウーッと襖が静かに開いた。

朔夜はそれに気付くと慌てて起き上がる。

「クス、どうぞおきこなさりやすに」

「……綺麗……」

思わず朔夜の口から言葉が漏れる。

瑠璃は先ほどの甲冑とは違い、色とりどりの十一単を身にまとっている。顔には薄く化粧がしてあり、頭には美しい髪飾りを付けている。

しかし、一つ不思議なことに気付く。

「……髪が長い？」

甲冑を身に付けていたときは瑠璃の髪は肩に掛かる程度しか延びて

はいなかつた、しかし田の前にいる彼女の髪は腰のあたりまで真っ直ぐに延びていたのだ。

「ああこれは、私の守護神様が美の女神でして、この程度なら自在みたいですね」

「守護神？」

朔夜はミアカ達から聞いたことがあつた、瑠璃のように神の存在を知る人間の中には、神と契約し守護神として神を身につけることができるといつ。

それをするためには、厳しい条件があるらしいのだが、現人神である朔夜は無条件に契約を結ぶことができる。もちろんその力にも制約が掛かるため、今回のように髪をのばす程度の力しかないのだ。

「じゃあ、私をここに呼んだ理由を……の前に、私はあんたとここまでくるまでに、蒸気船やここに着いてから色々見させてもらつたわ、所々に神の力が使われている……神縛者に神を捕らえさせ、神縛者に操らせているわね？」

瑠璃は静かに皿を開じる。

「……はい」

「多少は仕方がないとは思つ……けど、もしもあんた達の頼みがそういうことなら、どんな手を使ってでも拒否をする」

今までに無いほど怒りを露わにする朔夜。

彼女にとって神は身近な存在、その神を道具のように扱われるのが許せないのである。

「心配しなくともそんな頼みをする事はありません、私がお願ひしたいのは別にあります」

「別？」

「まずは先日、娘を助けていただきありがとうございました」

「だから、それは人違いよ」

「クス……まあ良いでしょ……」

「そこあなたに頼みたいこととは娘のことです」

「……？勉強教えるとか？」

「また、娘に何かあると困らせん、ですから娘の守護神様を探してはもらえないでしょうか？」

守護神を身に付けると、ある程度の悪しき意志から身を守ることができるようになる。

また、瑠璃の美の女神のよう、「アリス」少しではあるが、神の力も使えるようになる。しかし、それは同時に神の自由を奪う行為にもなる。

「……見つけた神が了承したらね、無理矢理はしないわよ？」

「それで結構です」

「……後で、私を自由にして」

「あなたの望むままに」

しばらくして朔夜の監視が解かれ、それを確認すると業務があるからと瑠璃は部屋を出ようとし。

「ああそうだ、朔夜様あなたが望なら着物と装飾品を差し上げますので身につけてください。

女の子ですので、可愛くしたいでしょう？遠慮なさらずにもうしてください、それと謙信ですがあなたが気に入っているようなので、護衛に付けておくよう言つてあるのでよろしくお願ひいたします」

「どうも」

瑠璃は部屋を後にして、再び一人になる朔夜、姫が部屋を訪れると言つことなので、それまで待たなければならなかつた。しばらく、横に寝そべつてゐる。

「朔夜様失礼いたします」

姫が来たのだろうかと、体を起こす。

静かに襖が開くと、そこには瑠璃の姿が。

いや違う、瑠璃よりも幾分年を取つているように見える。

「……やつぱりあなたの差し金か……天翔院様」

天翔院と呼ばれた女性は優しく笑う。

「いのでもしないと、動いてくれなかつたでしょ？」

「前の時といい、強引なのよ」

「琥珀ちゃんが貴女のこと凄く氣に入つてね、どうしてもと言つ

「ことだね」

「なんで私が現人神だと教えたの？」

「……？ そのことは誰にも教えてないわよ？」

「何言つてんの？ 私のこと知つてるのはあなただけじゃない？」

「誓つて言つわ、私は約束は破らない。貴女のことを黙つておくことが、貴女のお母様との約束よ」

天翔院が嘘をついているわけではなさそうだ、朔夜は首をひねる。

「……もしも貴女のことが知られたとなると大問題になるわね……
私の方でも調べておくから、あなたは琥珀ちゃんをお願いね」

天翔院は部屋を後にした。顔こそ瑠璃に似てはいるが性格は違うようだ、瑠璃と違いおおらかな性格をしている。

朔夜は以前彼女に助けられたことがあり、実は武藏に来るのも初めてではない。

以前、姫を助けた際も天翔院の要請を受けてのことだつた。

朔夜が現人神と知つているのはヤマト広といえ彼女だけが知る事実だつた。彼女が漏らしたのではなれば、誰か朔夜の存在を知るものがいる。

そのことが後に大問題となるのだった。

キスミは既に事切れ道に横たわる子供の遺体に触れていた、外傷はない。即死と言うのがしつくりくるような死に方をしていた。

キスミは朔夜と別れて既に三人の遺体を発見している。また、聞いただけではこの一週間で50人近い人間が同じ死に方をしているという。

キスミは一旦アオイと合流しようと考へていた。最悪のパターンの時、自分だけでは手に余るかもしれないと考えたからだ、アオイを探そうとキスミが動き出したとき、キスミの後ろを陰が付いて来る。それは、少し前からキスミに張り付いていた。

キスミはもしゃと思ひ走り出す、陰も一緒に速度を上げる。

「悪いが、三人の中で俺が一番優しくないんですよーー！」

キスミの表情がみるみる険しいものに変わる。
手の爪が鋭く伸びる、その爪で陰を切り裂く、しかし手応えはなく
爪は空を切り裂いただけだった。

キスミが再び陰の方へ振り返る、すると陰はその姿を変え始めていた。
黒い球体の雲のような形から、狼のような形へとその姿を変化させてゆく。キスミにはその狼に見覚えがあつた。

「こいつは……貪狼！？」

貪狼と呼ばれた狼は、キスミへと牙を向き襲いかかる。

「朔夜様！！」

「……キスミ？アオイ！？」

「朔夜様、どうなさいましたの？」

後宮のある部屋で、姫を連れてくるからと一人待っている朔夜。しかし、何故か言い知れぬ胸騒ぎがしていた。監視が取れたことで多少ミアカとも話すことが出来るようになり、ミアカも朔夜を心配して声を掛けた。

「……わからない……なんか一人に良くないことが起きているような胸騒ぎがして……」

多少顔が青ざめている朔夜、ミアカ達と朔夜はほぼ一心同体。彼らに何かあれば、朔夜にもすぐにわかる。

朔夜はすぐにもミアカを一人の元へ行かせたかったのだが、こんな状況で彼女まで失えば朔夜に鬪う手段が無くなってしまう。ミアカもそれがわかっているので、決して行こうとはしなかった。

「大丈夫ですわ、あの二人は殺しても死にませんことよ」

「そうね……私もそう信じてる」

少し落ち着きを取り戻すと、部屋の前から声が聞こえてくる。はしゃぐ子供の声だ。
静かに襖が開かれた。

開いたとの向こうには、朔夜より少し年上の女性と隣にまだ幼さの残る女の子。

黄色の着物を着た女性は戸が開くなり、正座で座り頭を下げる。女の子は礼儀良くはしているが姿勢はそのままだった。どちらが姫様かは一目瞭然である。

「やつぱりあの時のお姉さんだ」

姫は攫われ、救出されたとき意識は朦朧としていた。全てを覚えているわけではなく、断片的にではあるがあの時のこと覚えているのだ。

「人違いよ姫様、その人は三つ編みなんかしてた？ 眼鏡なんかしてなかつたんじゃない？」

「髪の色も違うわね、でもあなたよ。その顔、その優しい眼差し、見間違わないわよ」

姫は恐らく十一歳程度、幼いながらに凜として朔夜と話す。さらわれた時も命乞いなどせずに、悪態をつくぐらいだった。この姫には流石に。

「認めるしかありませんわね……現人神うんぬんはこませるとして、命の恩人の件は誤魔化せそうにありませんわ」

「うう……」と朔夜は軽いうなり声を上げた。

「朔夜って言うのよね？ あたしの守護神を探してくれるんでしょ？」

凜とした口調とたたずまいではあるが、そのまだ幼い瞳には好奇心

に眼を輝かせている。

朔夜は少し頭をかき。

「そういうことになつてゐみたいね」

「じゃあ早く行きましょー！…友梨もついてくるでしょー…？」

先程から同じ姿勢だった友梨と呼ばれた女性。姫に問い合わせられると頭を上げ。

「それが私の使命でござります」

「じゃあ早速行きましょー！」

ああそうだ、あたしの名前は琥珀、よろしくね

事を凄い勢いで進めていく琥珀。

朔夜はそんな琥珀を見て、台風みたいだと思つていた。

「ねえ守護神つてどうやって探すの？」

「結構面倒くさいのよ？あなたに適合する神を探して、その中でも守護神としての能力を持つた神を選ばなきやならないし、それから……」

「まだあるのー？」

「当然！すぐに別れちゃう人間のカップルと違つて、一度守護神と

契約したら一生添い遂げなきゃいけないの！ホイホイ取り替えるわけにはいかないのよ」

人差し指をぐいっと琥珀の顔の前に出し迫る朔夜。流石の琥珀もこれにはたじろぎ一歩下がる。

「でも神様を嫌いになつたりするの？」

朔夜の顔が少し厳しい顔になる。

「もしあなたがそんないい加減な気持ちで守護神を探すつもりなら、私は一切の協力はしない！」

朔夜がきつい口調で琥珀をたしなめる、普段お姫様として甘やかされていいる彼女にとつては堪えたのだろうか？

「『めんなさい…そんなこと言わないから…』

一つの瞳から涙を流し、朔夜に顔をうずめて泣き出しちゃった。

「な、泣く」と無言でしょー？」

「つあああん…」

琥珀の止まらない泣き声に、どうしていいのかわからないでいる。

「……姫様は今まで叱られたことがありませんから

「え？」

琥珀の後ろで静かに立っていただけの友梨が不意に口を開いた。

「お母様であられる陛下は、国王としての業務で忙しく姫様と接する時間があまりありません。

お父様であられる幸村様は立場違われるので、姫様と共にいることがかないません」

「立場が違うって？」

「この国ヤマトでは、王位継承は女性にのみ行われるのです。よつて第一王位継承者である姫様は、幸村様よりも上におられるお方、幸村様が姫様に口は出せないので。ましてや、私達使用人がそのようなことを出来るはずもありません」

「なるほど……天翔院様は甘やかしてるんだろうしね

朔夜は足元で泣きじやぐる琥珀の頭を撫でる。
その手に琥珀が気づくと、泣くのを止めた。

「つたぐ、太ももん」チョビーチョビじゃない……
一緒に探してあげるから、泣きやんでよっ」

「本当?」

「セツキの」とまもれるなうね

「うそ、守るからお願ひ

その琥珀の約束に朔夜はにっこりと笑い、守護神探しに向かった。

三人はまず、城の中でも特に広い後宮で守護神を探し始める。

しばらく歩いていると、朔夜が足を止める。周りを見ると女性ばかり、さつきの友梨の話を聞いた後ではなんとなくこの状況も納得がいった。

後宮と言つてもかなり広い。一つの小さな街程度の広さはありそうである。

それだけの広さがあれば、中にはいろいろな施設等もある。その中でも特に広いという花畠へと友梨に案内された。

その花畠は季節を問わず、様々な花が咲いている。

「ねえ朔夜、ただ歩いてるだけみたいだけどちゃんと探してるの？」

「探しててるわよ、この花畠の中にもいるしね」

「見たい、見せてよ……！」

「…………まあ良いか…………」

少し気の乗らない朔夜だったが、目の前の花に手をかざす。田を閉じ。

「汝、我的前に姿を見せよ

呪文のような言葉を呟くと、手をかざしていた花が輝きはじめ、光はやがて人の形を取り始める。

「うわあ……キレイ

琥珀と友梨は目の前の光景に田を奪われている。花の神が琥珀達の目の前に現れたのだ。

一言で言うなら妖精のような姿をしている。

優しい笑顔で、朔夜に挨拶をした。

「可愛い！あたしこの神様守護神にしたいわー！」

可愛らしい花の神を大層気に入った様子の琥珀だったが。

「駄目よ、この神様じゃ能力的にあなたを護れないし、あなたに適合していない。闇雲に契約しても意味ないのよ？」

「でもお……」

「大丈夫、あなたがそう望むのならきっと可愛い神様が見つかるわよ」

朔夜はそう言いつと、指を鳴らし花の神の姿を消した。
その後もしばらく後宮での守護神探しが続くが、一向に見つかる気配はなく、その日の守護神探しは終了した。

朔夜が部屋に戻り、準備してあった布団に沈み込む。そのまま少し考え事をしていた。

アオイとキスミが朔夜の元を離れてもう半日が過ぎる。これほど長い間彼女の元を離れたことは一度もない。

『不穏な気配』という言葉が脳裏によぎる。

この都で何かが起きていると言い知れぬ予感がしていた。
ミアカは大丈夫と心強い言葉を口にしてはいるが、やはり一人を心配している様子。

明日は琥珀の守護神探しのため、城下町へと行く予定にはなっている。

その時に一緒に探そうと考えていた。

何やら考えがまとまらないうちに、朔夜に睡魔が襲いかかり夢の世

界へと睡魔が誘うのだった。

思えば朔夜に取つてこの1日はハードな1日で休む暇も無かつた。
朔夜はつかの間の休息を取るのだった。

日が昇り、朝日が部屋の中を照らす。頬に朝日が当たりその温もりで朔夜は目を覚ました。

昨日は早く寝たためか、ニアカに起こされるよりも早く起きることができたようだ。

また、昨日は入浴もしていない。聞いていた朝食の時間までは時間があるので、聞いていた大浴場へと向かつた。

後宮の大浴場は上位の人間用と、下位の人間用とに場所が振り分けられている。彼女は上位の大浴場に入る許可をもらっているため、そちらへと向かつた。

後宮では朝早くから女性達が仕事を開始している。この女性達の多くが兵士として城に仕えている男達の奥さんである。

掃除に選択、大厨房では料理も作られている。

せわしない様子の後宮を見て、ここでは働きたくないと考える朔夜だった。

大浴場へと到着し、脱衣場へ向かう。着物を脱ぎ、自分も自慢しているスタイルの体がさらけ出される。手ぬぐいで前を隠し、お湯を体にかけてから湯船へと浸かつた。

湯加減はちょうど良い温度に保たれており、お湯の気持ちよさを感じている。

ふと二人のことを考える。昨日はどうとう戻つてこなかつた二人。今何をしているのだろうかと。朔夜がブカブカと体を浮かせながら湯船に浸かっていると。

「気持ちよさそうですね」

湯気の向こうから声が聞こえてきた、先客がいたのだ。朔夜は顔を赤らめ体勢を元に戻す。

真っ赤になつた顔で湯気の匂いを見ると、国王ながら無防備で湯船につかる、瑠璃の姿があつた。

「おやこなやひづか」

「……気になります」

瑠璃は朔夜の隣へ座る。朔夜もなかなかのプロポーショナルをしている、しかし美の女神を守護神に持つ国王瑠璃。彼女のスタイルには程遠かった。

朔夜はつい自分の胸を揉んでみる。

「琥珀はどうでしたか？わがまま等言つてませんでしたか？」

「……気になるんなうせ、親子の時間作つてあげたら？」

「その通りですね」

瑠璃はどこか陰のある笑顔で答えた。

「まあ、ここここ間は私がお姉ちゃんしてあげるわよ、だから安心して」

「あつがとつじります、朔夜様」

「私あんまり長風呂出来ないから、上がるわね」

「朔夜様、実は……」

風呂から出よつとする朔夜を引き止める瑠璃。

その表情は、やつままでの母親の顔とは違い、国王としての表情に変化していた。

「この一週間ほど街では急に死亡するという事件が増えています。今日は街に行かれるそうですが、十分気を付けて。護衛も付けますので」

恐らく、アオイ達の件と同じ事件だと考えていた。彼らが戻つてこないことを考えると、恐らくは神がらみ。
そう考へると、背筋に寒気を覚えていた。

「……朔夜様？」

「なんでもないわ……十分気を付けとくわね」

何とか作ることのできた笑顔で、浴場を後にした。

「う……」

アオイは暗闇の中目が覚める、昨日は油断したとはいえ無様な姿を晒した自分を責めていた。

朔夜と一日以上離れたことはなく、主である彼女と長い時間離れる力が出なくなることも、今回発見する事ができた。

アオイは手足を動かそうとしたが、何かに縛られているようで身動きが取れない、また暗闇なのでどうしているのかも把握できないでいる。

寝かされている場所が床の様なので、屋外ではなく建物中ではあるようだ。何とか逃れられないものかともがいてみるが、縄がかなりキツく結んでるのでびくともしない。キスミは無事なんだろうかと考えてしている。

「あれほど上玉の神はそつはいなぞ、何とかしろ」

「そつは言われましても、現人神の契約神、そつ簡単には」

「どんな手を使つても構わん！」

それと、現人神が姫と共に城下に出るらしい、手は打つてあるな？

「それはもちろん、禁軍専属の神繰者に尾行させます」

「ククク……現人神さえ思いのままになればこの国はおろか、世界をも手に入れることができぬ」

アオイはこの声に聞き覚えがある。顔までは思い出せないが、最近聞いた声だった。

そして、朔夜に危機が訪れていることを知る。このままでは自分が朔夜の枷になるとわかつっていたが、今はどうすることもできないでいる。

「ミアカ……キスミ……朔夜様を頼む」

暗闇の中目を閉じ、仲間に祈った。

再び暗闇の中に声が響く。

「貪狼はいつもどる？武曲はこいつを連れてでもじつてきたのだがな

……」

アオイは直感した、キスミはまだ無事だと。

朔夜は元気良くやつてきた琥珀に連れられて、朔夜が最初来たときに大袈裟な歓迎をされた、大広間へとやつてきていた。今日は城の外へでると言うことで、護衛が何人か付くということらしいが、まだその姿が見えない。まあそのうち1人は謙信だと言つことは言うまでもないが。

その謙信はすぐに見つかった。広場の長椅子に1人座り抜いた刀とずっとにらめっこをしていた。

「田つき怖いわよ？」

いきなり後ろから脅かす朔夜、しかし謙信は驚くことなく。

「それは酷いな」

ゆつくり笑顔で振り返り答えた。

「何やつてるの？」んな所で刀なんか抜いてさ」

「君がこの刀にも神様がいるつて言つからさ、何とか僕にも見えないものかなつて」

「そう簡単には姿見せてはくれないわよ」

何となく謙信との会話が楽しげな朔夜。それを琥珀に突っ込まれて

しまう。

「何だか楽しそうね？朔夜の恋人？」

「だ、誰が！？」

突然の質問につい声がうわずり、動搖してしまつ。さらに友梨が。

「その選択は間違ひありません朔夜様。謙信様は新卒の兵士の中です首席の成績を収めた方、更に軍の中でも上位に食い込む男前と評判ですでので」

「だから違うわよー！」

慌てて否定する朔夜、不意に謙信の顔を直視してしまつ。

「なんの話？」

今まで気付かなかつたが、端正な顔立ちをしている。スラリと伸びた長身、スタイルもいい。髪も赤みがかつていて、まっすぐに伸びた綺麗な髪の毛。改めてみると、かつこいい。

今まで何も考えずに謙信の傍にいた朔夜、急に恥ずかしくなり顔を赤らめていた。

「顔赤いよ？風邪でも引いた？」

謙信は顔を近づけ、額を当てる。目の前には謙信の顔。朔夜の心臓の音が大きくなる。

何でドキドキしてんのよー！と心の中で叫んでいた。

「……熱は無さそうだね」

「あ……あるわけ無いでしょ……馬鹿じゃないの！？」

大声で「まかしてはみたものの、その動搖までは隠しきれず。

「朔夜様の初恋ですわ」

ミニアカに揶揄され。

「つるさこミニアカ！！」

ミニアカを怒鳴る。

ミアカの存在を知らない琥珀達は不思議そうな顔で朔夜を見ていた。
朔夜のドキドキが收まらないまま、三人の護衛が広間へとやつてきていた。

「……どうしました？」

状況がわからない護衛の三人。

1人は謙信の直属の上司に当たる、軍団長の正宗。

1人は王家近衛師団の忠勝。

最後の1人は、王国軍左将軍の元就の三人と謙信で彼女達の護衛を務めることになる。

「謙信、何か朔夜様に粗相でもしたのか？」

「い、いえそんなことは……」

正宗が笑顔で謙信に絡む、元就は琥珀に対して挾礼をし。

「姫様、城の外は危険が多く存在しておりますゆえ、我々がついておりますが十分お気をつけください」

「わかつてゐわよ、早く行くわよ」

朔夜、琥珀、友梨と元就の四人が馬車へと乗り込み、他の二人が馬車を囲むように城を出発した。

城の出かけに正宗が謙信にぼやく。

「謙信よお元就には氣を許すな?」

「何故です?」

「……昔からいけすかねえのさあの野郎だけは」

「……はあ……」

何を言つているのか分からない正宗の言葉ではあったが、謙信は忠告を心に留めた。

一行は城下へと降り、街の至る所を散策する。
川や池、武器屋や装飾屋等守護神見合つた神を探すために歩き回る
が、琥珀に見合つ神は見つかることはなかつた。

「朔夜、真剣に探してくれてるの?」

「探してゐるわよ？ただいなだけ」

装飾品を持つてゐた朔夜が品物を置きながら言ひ。

「こんだけ探してもいないなんて……」

田も沈みかけ、辺りは赤く染まつてゐる。今日はもう時間切れで、城へと引き返そうかとしていたとき、元就が意外な事を言い出した。

「朔夜様、実はあそこにそびえる山は靈峰不一と言われ、神秘なる力が宿る山と言われております。そこならば、姫様の守護神も見つかるのではないでしようか？」

「……この時間から山に入るのは危険なんじゃない？」

「そつならぬよう、我々が護衛しているのですよ？」

「まあ、決めるのは琥珀よ」

朔夜は琥珀の方を見る。明らかに怯えているような琥珀の表情。無理もない。しばらくすると闇の時間が訪れる。

城の中という光の世界しか知らない彼女にとって、夜の山など未知の世界。

しかし、信頼する城の將軍達。心強い彼らの存在が彼女の恐怖を振り払つた。

「行くわ、守護神を早く見つけたいもの」

朔夜を除く彼等にとって、琥珀の決定は絶対である。

しかし、正宗は。

「待て元就殿、城へ伝令を飛ばし陛下の指示をあおいだ方が良いんじゃないのか？」

そういつ正宗に對し元就是凄い形相で睨みつける。

「必要無い、この場にいる姫の決定だぞ？
貴様如きが口を挟むな！」

「何い！？」

場に一触即発の空氣が流れる。お互に、腰の刀に手をかけかねない雰囲気だ。
しかし、そんな二人を琥珀がなだめる。

「正宗、私が選んだのお母様は関係ないわ」

「しかし……

「心配してくれてありがとう、でも早く守護神を見つけたいのよ」

琥珀は正宗の静止を振り切り、不一へと向かった。
途中、謙信が朔夜に訪ねる。

「……本当に大丈夫なのかな？」

「どういつ意味よ？」

「なんか……嫌な予感がするんだ……」

「大丈夫よ、私が何とかするから」

日はすっかりと沈み、辺りは闇の色へと染色されている中、一行は不二の麓にたどり着く。

夜の山は不気味な雰囲気を放っている。昼の顔とは違い、夜は山からの敵意さえ感じる。

朔夜は守護神を闇雲に探しているわけではない、琥珀の靈的な波動を感じ、それに近い波動を探している。この山が靈峰と呼ばれているだけあり、朔夜の靈的な力も少しばかり増幅している。

朔夜は何かを感じていた、それは琥珀に似たものではなく……

朔夜がその足を止めた時だつた。

目の前の茂みからガサガサと音がする。身構える元就達、音は次第に大きくなり、茂みの中から2つ陰が現れた。

「キスミー…？」

飛び出してきたのは、行方不明になっていたキスミ。かなりボロボロになつていて、更にキスミの目の前にもう一つ。

青白い鱗気を纏つた巨大な熊の姿。キスミはこの熊と戦つているようだ。熊は、キスミとは違い力強く吠えキスミに留めをさそつと襲いかかる。

キスミは立っているのがやつとの様子。反撃できるほどの力は残つてなどいない。

「行つてニアカ！！」

朔夜の耳飾りから、赤い髪をふわりとさせニア力が姿を現す、ニア力はすぐさま熊に対して手をかざす。すると熊は遙か後方へと吹き飛ばされてしまった。

「キスミー…？」

すぐさまキスミに駆け寄る朔夜。

朔夜から長い時間離れていたため、キスミの力は失われ弱体化していた。今すぐにでも消えそな程に衰弱していただめ、すぐに腕輪の中へとキスミの体を戻した。

一方、今起きたことに対する戸惑いをし隠せない元就達。だがすぐに我に返り、弾き飛ばされた熊を仕留めようと熊を追いかけその場を後にした。

「ニア力、さつきの熊は？」

「動物ではありませんわね……私が知る限りあれは……」

耳飾りから飛び出したニア力を見て、驚きを隠せない琥珀。

「ね朔夜、この赤い髪の子と黄色の髪の子は何？」

「あちや……」

「守護神みたいだけど、守護神つて一人に対しても一人だけなんじゃないの？」

うまい言い訳を考えようとしていたが、思いつかず黙り込んでいると。

「姫様、この世界で複数の神を従えられる人物といったら一人しか
ありえません」

友梨がゆっくりと朔夜に近づいてくる、朔夜も友梨の様子が違うこ
とを感じていた。

「現人神……朔夜様……それが何よりの証拠ですね？」

その口調には殺気がこもっている。

友梨は自分を殺す気だと感じていた。

「友梨……？」

「朔夜様……気を付けてください」

「わかつてゐるわよ……あの着物の下……神の力を感じるわ」

朔夜が指摘した通り、着物の下から一本の短刀を取り出す。

「あの熊と同じ匂いを感じるわね」

「朔夜様、命までは預けません、多少我慢してくださいませ」

「ミアカ！！」

朔夜から声がかかるとミアカはすぐさま、手をかざし友梨の短刀を
はじき落とす。

「フフフ……ありがとうございます」

友梨の顔が歪む。

朔夜がはっと気付き、短刀の落ちた場所を確認する。その場所は。

「琥珀……」

琥珀の目の前にそれは落ちていた。短刀から青白い鱗気がたちのめる。

鱗気はやがてある形をなす。

「貪狼、姫様をズタズタにしなさい」

青白い狼へと姿を変えたそれは、一直線に琥珀目掛けその牙をむく。

「……友梨？」

「姫様、あなたがいけないんですよ？あなたがあの時死んでいれば

……」

「死なせないわよ……」

貪狼の牙が届く前に朔夜が琥珀に飛び付く、その牙をかわす。しかし。

「朔夜様！」

「嘘でしょ？……？崖に飛び込むなんて……

貪狼、追いなさい！

「させませんわ……」

崖から落ちた一人を追いかけようと貪狼が動くが、ニアカがそれを阻止する。

しかし、貪狼はすぐに起きあがりニアカに反撃する。ニアカも再び構え、貪狼を迎撃しようとしたとき、ニアカの肩を光が打ち抜いた。

「キヤアアア……」

不意をつかれ、まったく防御ができないまま光の矢を受け、後方へとばされる。崖の手前で何とか踏みどりましたが。

「あう……」

貪狼の牙がニアカの腹部へと食い込み、そのまま崖下へと落ちていった。友梨が光が放たれた方を見る。

「……助かりました」

「馬鹿が、赤い髪の神はおろか現人神まで崖から落とすとは生きていればよいが」

「すぐに捜索へ向かいます」

「待て、現人神を生け捕る良い機会だ、私に考えがある……お前は先に戻つていい」

「……は、はい……」

友梨は男に言われるままに山を降りた。

「……姫はいなくなつた……後は私がこの国を支配するだけだ！」

現人神と奴が使役する三体の神の力を使ってな！！」

靈峰不一に狂氣にもにた男の笑い声が響いていた。

闇の中の光の女神

青白い熊を追いかけていた謙信達だったが、熊は途中で忽然と姿を消していた。

三人が戻つてくるとそこには、琥珀と朔夜、そして友梨の姿はない。そこにいるのは元就の姿だけだった。

謙信達は懸命に消えた三人を探す、しばらくして考えたくない結論に至ることになる。

崖からの転落。

この崖は高い。ここから転落すれば命など無いだろう。

「謙信行くぞ着いてこい！」

「はい！？」

正宗は謙信を連れ崖下へと探索に向かうつもりだったが、普段口を開かない忠勝がその沈黙を破る。

「もしも、姫様を崖から落としたものが現人神だとしたら？
あの熊も彼女の使役する神かもしれん」

謙信の顔が凍りつく。

忠勝の言葉も的を得手はいる。

「元就！姫様を見捨てるつもりか！？」

「そう熱くなるな、私が一人で行く」

「確かに、もしそうならお前達に行かせるのは危険かもしれんな」

「何？」

「お前達は先に城に帰るんだ、城が襲われんともかぎらん。
帰つて神縛者の長政に伝えておけ」

正宗、謙信、忠勝の三人は城へと戻り、元就は一人琥珀救出へと向かつた。

一方崖下へと転落した朔夜と琥珀。

二人は何とか生存していた。落下する際、朔夜がとっさに辺りの草木の神の力を借り、落下の衝撃を和らげていたのだ。
しかし、完全には衝撃を吸收させたわけではなく、朔夜はその衝撃で意識を失っていた。

「う……」

琥珀の目が覚める。意識を取り戻した琥珀はまず、側に朔夜がいることを確認する。

「朔夜！？朔夜！？」

懸命に呼びかけるが、朔夜からの返事はない。

「どうしよう……」

琥珀は今自分がいる場所を知ろうと周りを見るが。

辺りは闇に包まれ手の先を見るのがやつとな程度しか視界がない。自分がどこにいるのかもわからず、朔夜も気を失っている。何をしていいのかすらわからず、琥珀の眼には涙すら浮かんでいた。

「元就い！忠勝う！」

護衛の名を叫ぶが、声も闇の中に飲み込まれやがて消える。

「朔夜あ起きてよーー！」

朔夜の体を揺すつてみるが、起きる気配はなかつた。

「お母様……お父様……」

琥珀の頬を伝う大粒の涙。暗闇という状況と孤独が彼女の精神を蝕み始めていた。

琥珀はもはや泣くしかなかつた。

『泣かないで……私はここにいるよ……』

「誰ー？……朔夜？」

違う、朔夜は寝たままである。しかもこの声は耳に聞こえてくるわけではなく、頭に直接響いているように聞こえてくる。

「誰？ビニールのー？」

優しく暖かな声、まるで母の声を聞いているみたいに心が落ち着いてゆくのがわかつた。

今の状況で頼るものがない琥珀は、ふりふりと声に導かれるように歩き出していた。

光の矢に肩を打ち抜かれ、貪狼の牙によつて腹部を損傷し崖下へと転落したミアカ。彼女はボロボロになつた体を引きずり、朔夜の元へと急いでいた。

契約者である朔夜と離れてしまつたため、その力はどんどん失われて行つている。ミアカ自身立つていることもままならない状態だった。

微弱な朔夜の気配を頼りに、闇の中を進んでゆく。

ガシャン。ミアカの耳に甲冑の鉄の音が響く。

護衛に着いてきていた謙信達の誰かだろうと音のしたほうへと進む。それはすぐに見つけることが出来た、何も見えない夜の山でそれだけが青白い光を放っていたからだ。また、その光や感じる力は先ほどの貪狼に似ている。

ぼやけていた光がはつきりと見える位置にまで近づいてゆく。

その正体がはつきりと見えると、その姿にミアカの背筋がぞつとする。その姿はまるで甲冑を着て練り歩く人間の武将そのもの、ただ人間と違いそれには生氣が感じられない。顔にはマスクをかぶっているので素顔は見えないが、そこに生きた人間はいなかつた。歩く足元、腕が触れた木々が次々と枯れてゆく。

「……これは……？」

その異様な光景にミアカも息をのむ。

鎧武者は何かを探すようにさまでいるように見えた、ミアカはそれが朔夜を探しているのだと確信していた。

「朔夜様に危害は与えさせませんわ」

ミアカはボロボロになつた体を押して、鎧武者の前に姿を現した。

琥珀は声の主を探していた。地面の石をひっくり返し、土を掘つてみたりもした、だが声の主の姿はなく、気がつくと朔夜ともはぐれてしまつていた。

いつの間にか声も聞こえてはおらず、幻聴だったのかと諦めさえ見せていた。

一人になつた琥珀、彼女の頭によぎるのは……

「……お母様……お父様……」

両親の顔。

女王としての業務のため、母親として接することができなかつた瑠璃。

父親でありながら、身分の違いから父親として接することができなかつた幸村。

その二人の喜んでいる顔が琥珀の脳裏に浮かんでいた。

一人は身分の違いから業務の時に顔を合わせるしかない。その時の表情は女王と臣下でしかない。琥珀は思い出す。何時のことだったか？

あれは何歳かの誕生日……、一人が揃つて祝つてくれたことがあつ

た。

その時の笑顔をもう一度見たい……そつ心から願つた……

『あんたが作つてあげれば良いじゃない』

「……朔夜？」

琥珀の心に響く朔夜の声、すると琥珀の頬を一筋の涙がつたう。涙は一滴の露となつて足下へと落ちてゆき、はじける。

次の瞬間、眩い光が琥珀を包み込んだ。

琥珀があまりのまばゆさに目を閉じる、そつと目を開けると。

「……明るい！？」

琥珀は自分が洞窟の中にいることに初めて気づいた。朔夜もすぐそばにいる。

何が起きたのか理解できていない琥珀。

けれど再びあの声が聞こえてくる。

『私はここにいます、もう……あなたには見えるはずですよ？』

一度は幻聴かと諦めていた声。その声の主を探す。

「……あ……」

今度は探すまでもなく、その姿をとらえることができた。

目の前に、光り輝くドレスをまとつた美しい女神の姿がそこにあつた。

「……闇の中の光の女神……か……痛た……」

「朔夜、目が覚めたの？」

「あちこち痛いけどね」

『はじめまして朔夜様』

「こちらこそ女神様……琥珀この女神様と契約する？闇を照らす光……あなたにぴったりじゃない？」

「うん、私もお願ひするわ……女神様、私の守護神になつて！？」

優しげな女神の顔から笑みがあふれる。

「決まりね」

朔夜は琥珀の額と女神の額に手をかざす。

女神が目を閉じると、琥珀もつられて目を閉じる。

次に、朔夜が呪文のような言葉を呟く。

「我現人神において命ずる、汝琥珀と共に歩まんことを……」

朔夜の手が光る、ゆっくりとその手を離すと琥珀と女神の額には同じ印が輝きそして消えた。

「……終わり？」

「まだ後一つ大切なことがあるわよ？」

「まだあるの？」

「当然」

朔夜が女神を見ると、女神もこつこつと笑い頷いた。

「あなたがこの女神様に名前を付けるのよ」

「……名前？」

「そう、それがあなたの守護神である証になる、大切なことよ」

名前。琥珀は今まで生きてきた中で恐らく、何かに名前を付けたことなど無い。

「朔夜あ、なんて名前が良いかなあ？」

「あなたが思うように付けたらいいわよ。

一生懸命考えて付けた名前なら、彼女も文句は言わないわよ

「……わかった」

琥珀はしばらく考えていた。一つの名前が浮かび上がってはやめ、浮かび上がってはやめを繰り返す。可愛い名前やカッコイイ名前。いろんな名前をしばらく考えていた、どれくらいの時間考えていたのだろうか？琥珀はついに名前を決めた。

「一度名前を決めたら変更は効かないから、そのつもりでね」

「わかってるわ」

琥珀は緊張する声で女神に名前を付ける。

「あなたの名前は……」

女神も優しい眼差しでそれを待つ。

「あなたの名前は、煌めく女神……だから、『キラ』よ！
……駄目かな？」

恐る恐る朔夜の顔を伺う。

「彼女に聞いてみたり？」

「どうかな？」

女神……いやキラの顔はより一層輝きを増し、微笑んだ。

『素敵な名前ですね琥珀』

「本当…？」

琥珀の顔から笑みがこぼれた、念願の守護神を手に入れたからだ。

「これで契約終了よ」

「うん、ありがとう朔夜」

朔夜はにっこりと笑つた後、上を見上げた。

キラの光によつて朔夜は自分が穴に落ちていることに気がついていた。

そこから脱出するためには、壁を登り落ちてきた穴から出すのが一番の近道である。

「ねえキラ、ここは他の田口無いの？」

「あれ」とはありますか、かなりの時間が掛かります」

「じゃあ、この壁を登る方が早そうね」

壁の端や土に手をかざしてみる。

「やっぱつこの神は微弱ね……力を借りるのは無理か……」

「元就達を待つた方が良いんじゃない? キラの光もあるからせつと
氣づくわよ。」

「多分ね、でもニアカには時間が無いからってあげないと」

朔夜は感覚で気付いていた、ニアカがあの後深手を負っていたことを。

「…………朔夜様」

その時、腕の飾りからキスミの声が聞こえてきた。

「キスミーへ平氣?」

「そんなことよりも……今は外に出でません……」

「…………せいで?」

「もうじき死へ死がやつてしまふ」

答えたのはキラだった。

「朔夜様がここへいらっしゃったすぐ後に、得体の知れない気配が突如現れました。その気配からは死の香りが漂っています」

「……なによそれ？」

「何かはわかりません、ただ朔夜様を探しております」

朔夜はキスミとキラの様子からそれがただ事ではないことは感じていたが。

「だったら余計にニアカを放つてはおけないわ！」

「朔夜様……」

この時誰も気付くことはなかった、草木をことごとく死滅させたそれは、穴からこもれる光すらも、死に至らしめていたことを。穴の外に漏れている光は、あるものによって死んでいた。そこにはたものは、ニアカが立ち向かった鎧武者。

そして、鎧武者の手の中には今にも朽ち果てそうなニアカの姿があった。

不可視の剣

辺りに立ち込める死臭の香り。キスミが言っていた死が上に来ていることを肌で感じている。

また、その周辺の草木や小動物に宿っている神々の気配がどんどん失われている、死によって死滅しているのだ。

キスミがいつになく、警戒心を強くしている、キラもかなり緊張している。

朔夜もまた緊張をしていた、ニアカ、キスミ、アオイの三人が現在闘える状態ではない。

琥珀の守護神となつたキラも戦闘主体の神ではないため、闘いには不向きである。

「ねえ朔夜、あなたはやっぱり現人神なのよね？」

「そのことは忘れて」

「そうじゃなくて、上にいるのって結局神様何でしょ？ だったらあなたに逆らえないんじゃない？」

確かに現人神は神の上に立つ存在。あらゆる神々が朔夜の僕となる、しかし。

「例外があるのよ」

「例外？」

「邪神……魔族に墮ちた神々は神の理から外れるの、墮ちた神は私でも使役出来ない」

「何よその設定！？」

「知らないわよ、私が自分の力を知った時からそんなんだから」

「役立たず！！」

朔夜と琥珀が姉妹喧嘩のような言い争いをしているが、事態は深刻だった。

辺りには上にいる死の神に対抗できるほどの力を持った神が存在しない。キスミならば十分に闘えるのだが、まだ力が戻らない。

ミアカとアオイは行方が知れない。

現人神といえども今の状況はかなりのピンチだった。

「……元就達が来てくれば……」

「彼らはただの人間、来たら殺されるわよ……」

上では光が溢れる穴に鎧武者が近づいていた。

腕にはミアカが、息はしているので死んではないようだ。ゆっくりと穴へと足を進めてゆく。

光が鎧武者に触ると、その輝きを失い闇に飲み込まれてゆく。その異変に真っ先に気付いたのは、キラの契約者となつた琥珀だった。

琥珀は上を不意に見上げたとき、光が妙に消えてゆくことに気付いた。消えゆく光の中からそれはゆっくり顔を出す。

「さ、朔夜あ！？」

悲鳴にも似た声で朔夜を呼ぶ琥珀、ただならぬ声に慌てて振り向いた。

「あ、あれ……」

琥珀が人差し指で上を差す、朔夜がその場所を見ると。

「……出たわね！」

青白い鎧武者は朔夜達の行う場所へと飛び降りる。

朔夜の前に立ちはだかる鎧武者、その体からは生気が感じられない。まるで靈体を見ているよう。異質な気配に恐怖さえ覚えていた。それでも冷静に対処しようとする朔夜、しかし鎧武者の持っているものを見ると表情は一変してしまう。

「ミアカ！？」

変わり果てたミアカの姿、まだ死んではないようではあるが、かなり危ない状態に思える。

鎧武者はあざ笑うように、ミアカを朔夜の元へと投げ捨てた。

朔夜はすぐさまミアカを耳飾りへと戻し、鎧武者を鋭い眼光で睨みつけた。

「……あんた何者よ！？何でミアカを！？」

言葉など発しそうに無かつた鎧武者だが、意外なことに言葉を放ち始めたのだ。

「赤い髪……蒼い髪……黄色の髪……そして現人神……安心しろ……お前達の命は奪わない……ただ生ける屍となつて、服従してもら

うがな！…」

初めは波長が合わないようなノイズ混じりの声だったが、だんだんと波長があいはつきりとした口調になる。

朔夜は確信したこの鎧武者には使役している契約者がいること。

「キスミ聞こえる？」

「はい」

「体の状態はどう?」

「まだ、三割程度しか……」

「『』のまま指をくわえて大人しくするのは、私嫌いなの。
『イミナ』行くわよ？」

「万全ではありますんが、おっしゃる通りに」

朔夜は『イミナ』と呼ばれる何かを行つため、静かに呼吸を整える。

「何をする気か知らんが、無駄だ！」

鎧武者が腰に差していた太刀を抜き、朔夜に襲いかかった。

「キラ朔夜が殺されちゃつ、何とか出来ないの！？」

「私は攻撃は無力ですが

キラの腕に巻かれている、羽衣が伸び朔夜を囲む。それは光の壁となり、太刀を防いだのだ。

「守りの力なら自信があります」

しかし、その光の壁も鎧武者の死滅の力に浸食されてゆく。

「こんなもので止められると思つなあ……」

光の壁が闇の中に吸い込まれるように消えてしまい、完全に朔夜が無防備となってしまった。

「くっ、仕方ない行くよキスミーー！」

朔夜が腕飾りの鏡を握りしめた時だった。

「やめろおーー！」

上空から響く声、その声の主はなんと。

「謙信ーー？」

「良かつた間に合つた……」

朔夜に振り下ろされていた太刀。それを謙信が刀で受け止めていたのだ。

「貴様……命令されたのではないのか？城へ帰れと？」

突然過ぎる謙信の登場に戸惑いを見せた。

「……僕は頭が良くないからね、ある人の言つことだけは疑わずに

聞くようにしているんだ！

僕の師である正宗団長の言葉だけはねー！」

謙信は元就からの命令で城へと戻る途中に。

『謙信良いか？お前は姫様達を探しに行け、嫌な予感がする』

『でも命令は？』

『言つたろ？俺は元就の言つことは信じるなつてな』

正宗の言葉を信じて朔夜達を探していた謙信。途中光の柱が急に立ち上った場所へ来てみると、朔夜達がピンチになっていたと言つことだ。

「正宗め……余計な真似を……」

「朔夜さんや姫様は僕が守るー。」

「馬鹿が、兵士になつたばかりの小僧に何ができるーー。」

謙信は刀を構える。

「現人神は僕にこつ言つた、『僕の刀の神は僕を気に入つてゐる』。僕は頭が良くないから、せめて僕の刀の神様に恥じない行為をするんだーー！」

「謙信……」

鎧武者は物凄い猛攻をかける、四方八方からの縦横無尽な斬撃の応

酬。

謙信はこれを見事に受けきつていた。

「正宗殿、良かつたのか？彼を一人だけで行かせて」

城に戻る道中で忠勝が正宗に訪ねる。

「忠勝、世の中には天才ってのがいるもんだよな……」

「……？」

「謙信は天才って奴だ、乾いた砂みたいに何でも吸収しやがるし、竹みたいに成長もはやく、雑草みたいに強い。もう俺でもあいつには勝てん」

「さ、貴様ーー！」

斬撃が謙信に届かぬ苛立ちから、斬撃が乱れ始める。

「謙信凄い……」

「僕なんかまだまだ正宗さんの足元にも及ばないよーーー」

鎧武者の一瞬の隙をつき、謙信の攻撃が届く。
その攻撃によつて肩の甲冑がはじかれてしまつ。

「おのれえ！！」

鎧武者の斬撃が更に激しさを増す。

太刀を振りかぶり、凄まじい勢いで振り下ろす。

「ぐつー！」

謙信はとつさに刀で受け止めよつとした、しかし。
ギィィインー！

鈍い金属音と共に、謙信の刀は根元から折れてしまった。

「ふ……フハハハ！！所詮はナマクラ、貴様もその程度だーー！」

鎧武者は続けざまに太刀で謙信に攻撃を仕掛ける。

「キスミ、準備はいいーー！」

朔夜も謙信のピンチに再び『イミナ』をやうづとする。

鎧武者の太刀が謙信に向かつてくる中、謙信は微動だにしなかつた。
刀が折れ闘う手段を無くしたため惚けているわけではない。

彼は信じていた、朔夜の言葉を。

彼は信じていた、自分の刀に宿るという神を。

イミナをやうづとしていた朔夜が止まる。

「謙信……あんたの刀……とんでもない神様が宿っていたんだね……」

…

鎧武者の太刀が空中で動きを止めていた。

寸止めをしているわけではなく、鎧武者自信驚きを隠せない。

謙信は刀身の無い刀で刀を受ける体勢を取っている。

「何が起きている！？」

鎧武者が力を込めるが太刀はそれ以上進みはしない。

鎧武者が一度体勢を整えるために後方へと下がる、しかし謙信がその隙を見逃すはずがなかった。すぐさま大地を蹴り、鎧武者へと接近する。

鎧武者は太刀で受けようと構えるが。

「貴様の刀には見えぬ何かがあるようだが、止めてしまえば同じことよー！」

ザシユー！！

鎧武者の籠手が弾け飛ぶ。

「何だと！？」

青白い腕が剥き出しどなり、傷口とも思われる箇所から、青白い煙のようなものが上っている。

「刀をすり抜けるだとー？貴様、その刀使いこなせるのかー？」

「…………わからぬ、ただそつなる気がしただけだ」

鎧武者は天才といつもの目眩の当たりにした。

初めて手にする力を使いこなす、謙信に恐怖さえ覚え始めた。

一方の謙信初めての力を使ってはみたものの、流石に戸惑いを見せ
朔夜に訪ねた。

「朔夜さん、これが神様の力？」

「呆れた……知らずにそんだけの力使いこなせたの？」

「信じてたからね朔夜さんの言葉を」

朔夜は少し顔を赤らめる。

「つたく恥ずかしい」と言わないでよ！

いい？その刀の神様は『不可視の神』。目に映ることは決してない
けど、確かにそこにはいるわ。無いものを作り出すことが出来るみ
たいね、まああなたの力が弱いから見えない刀を作り出すのが精一
杯みたいだけど

「そうか……ありがとうございます、それでも十分すぎるくらいだよ

「その神もあなたを気に入ってるみたいだから、守護神にしちゃつ
たら？契約する？」

「うん、でも先にあの人へ帰つてもらわないとね」

劣勢に立たされた鎧武者。

その様子を離れた場所で見ているものがいる、鎧武者の術者である。

「……こちらが不利のようだな……

破軍、退け」

その指令が思念を通じ鎧武者へと届く。

「わやんと置いた産は忘れずにな」

指令を受け取った鎧武者はすぐさま行動に移った。

「氣を付けて、あいつまだ何かするつもつよ」

謙信に斬られた右腕を空くとかざす。

「ただ引くだけではつまらん、貴様達には生を埋めでてもなつても
ひつせーーー！」

鎧武者の腕に触れた全てが死してゆく。
空氣すらもその対象としていた。

「まあー、逃げるわよー？」

「もう遅ーーー！」

空間が死臭で覆われ、周りの岩盤が崩れかけた時。
「シコーーー！」

切り裂かれる鈍い音。

見ると鎧武者が真つ一つに切り裂かれていた。

「ぐあおー！」

嫌な叫び声と共に、鎧武者は鎧だけを残し、宙へと消えていった。

「元就ーーー！」

琥珀が鎧武者を切り裂いた人物を呼ぶ。そこにいたのは元就。身の丈ほどもあらうかという大剣で一刀両断にした。

「姫様遅くなつて申し訳ありません」

「大丈夫よ、おかげで守護神も見つかったから」

「そうですかそれは良かつた」

元就が不意に謙信の顔を見る。

「……城へ戻れと命令したはずだが?
……正宗か?」

「いや……はい……」

「まあいい、結果姫様達が助かったのだ、不問にしよう。だが次はないぞ?」

「ありがとうございます」

話が終わり脱出の準備をしていると。

「元就さん、友梨つて侍女はどうに行つたの?」

元就は朔夜の顔を見る。

「さあ、私が駆けつけたときには誰も」

「 もう……」

「 まあ、準備が出来ました。早く脱出して城へと戻りましょー!」

「ひして縦穴からの脱出に成功した朔夜の達。
しかし、これから戻るつとする都では更なる事態が起きていたので
ある。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4135z/>

やおろずの神々のおわす国

2012年1月8日21時52分発行